



Title	第1次世界大戦とアジア：シンガポールにおけるインド兵の反乱(1915)
Author(s)	桑島, 昭
Citation	大阪外国語大学学報. 1985, 69, p. 23-48
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/81049
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

第一次世界大戦とアジア

—シンガポールにおけるインド兵の反乱 (1915) —

桑島 昭

THE FIRST WORLD WAR AND ASIA

— Indian Mutiny in Singapore, 1915 —

Sho KUWAJIMA

Preface

1. The First World War and Asia

2. Indian Mutiny in Singapore

(1) History of Research on the Mutiny

(2) Process of the Mutiny

(3) Causes of the Mutiny

3. The Mutiny and Japan

(1) Japanese Community in Singapore

(2) The Mutiny and the Japanese Navy

(3) Public Opinion in Japan after the Mutiny

4. Anti-Japanese Boycott Movement in Singapore, 1915

Conclusions

My work tries to throw some light on the character of the First World War through the analysis of the history of Singapore in the year of 1915.

So far, the studies in the Mutiny have mainly or exclusively depended on the British official records though these are of course very useful if carefully read. Here, I added Japanese diplomatic papers, both published and unpublished, war-time diaries of the Japanese Navy and some memoirs of Japanese residents in Singapore as source materials for the purpose of grasping the meaning of Japan's participation in the suppression of the Mutiny in the context of the history of Singapore or from the perspectives of Modern History of Asia.

I tried to connect the Indian Mutiny with anti-Japanese boycott movement of the same year which protested against Japan's demands of 21 Points to China, because the Martial Law, which was successful in suppressing the Mutiny, also contributed to the control of the expression of anti-Japanese feelings of the Chinese people in Singapore.

Indian Mutiny was basically manifestation of the anti-war feelings of the Indian people and their will to the independence of India however limited their scope of the Mutiny was, and anti-Japanese boycott movements in China and South East Asia in 1915 were precursors to the mass movements after the War which also covered Singapore. It seems most likely that the Mutiny facilitated the growth of the boycott movement in Singapore though these two were caused by separate reasons.

Therefore, Anglo-Japanese Alliance and the regime of Martial Law on the one hand, and the Mutiny and the Boycott movement on the other were the main framework of the political situation in Singapore of 1915. It is pointed out in this paper that some of Japanese opinion leaders, who assumed critical attitudes towards Japan's participation in the suppression of the Mutiny, found themselves difficult to seize the basic character of the history of Asia including Singapore.

This work will later appear in an enlarged form written in English.

I would like to express my grateful thanks to the Librarian and staffs of the Central Library, National University of Singapore for giving facilities to my work and their kind help during my short stay in Singapore in 1983 and 1984.

I could also get many useful advice and suggestions from Dr. Edwin Lee, Department of History, National University of Singapore.

まえがき

これまで現代史の起点としてもとらえられてきた第一次世界大戦を文字通り世界大戦として描き出した歴史叙述は意外と少ない。それは、一つには世界大戦としての性格そのものにも由来するものであろう。また、第一次世界大戦期のアジアについては、日本では青島占領から21ヵ条要求へと連なっていく日中関係を軸として描かれ、日英関係もこれとのかかわりにおいて論ぜられてきた。¹⁾日本の対中国政策がこの時期以降もつ比重の大きさはいうまでもないが、大戦を契機に日本の資本進出の舞台となったアジアの広汎な地域をも同時的な視野におさめることによって日中関係のアジアのなかでの位置をも明確にすることができよう。

1915年2月15日、シンガポールに駐屯していたインド人兵士によって構成される第五軽歩兵連隊 (Fifth Light Infantry) が反乱を起こし、ドイツ人捕虜を釈放したほか、イギリス人將校や兵士、市民を殺害し、兵営を占拠した。しかし、反乱は数日後にはほぼ鎮圧され、残った者はジャングルに潜んで抵抗するか、ジョホール方面へ逃れようとした。

2月18日以降、日本の新聞各紙は在留日本人の動向・安否に注目しつつ反乱の推移を伝えた。例えば、2月19日付『東京朝日新聞』は、

「…若し萬一独逸の教唆により多数印度兵が叛兵に加担することあらんには油々敷大事に立至るべし。日英同盟の情誼に照し日本人の新嘉坡一帯に在留するもの少からざる事実に顧みれば我

邦の責任亦輕からずと謂ふべし」

と論じていた。しかし、当時「新嘉坡暴動」としてこれほど大きく扱われた事件も、その後日本で出された第一次世界大戦史、東洋外交史、日英同盟あるいはインド民族運動史の研究において意識的にか無意識的にか触れられることがなかった。

そうしたなかで、第二次世界大戦中に出された『印度独立運動史概観』と題する小冊子が、「1915年1月^{ママ)}」、シンガポール駐屯の印度兵が革命党の誘致に応じて蹶起した」と記している。²⁾この文章は、1916年に大川周明が著わした『印度に於ける国民運動の現状及び其の由來』において「新嘉坡駐屯印度軍隊は、同じく革命党の誘致に応じ、逸早く蹶起して独立の旗を挙げ、英人士官を屠りて兵舎を占領し、其勢猖獗に赴かんとした」とのべた部分に拠ったと推定されるが、大川が第一次世界大戦期に言及した「革命運動」弾圧への日本の参加、とくに「新嘉坡の叛兵は、最も予期せざりし勁敵の出現に驚愕し且失望した」とする理解には触れていない。³⁾

シンガポールの反乱については、これまでシンガポールとマレーシアでいくつかの論文が書かれている。また、第一次世界大戦期のインド人の革命運動であるガドル（反乱）党の運動を扱ったインド人研究者の多くがこの反乱に一章を割いている。⁴⁾

本稿は、これらの研究を参考にしながら、日本側資料や他の資料を加えてシンガポールの反乱の性格ならびに反乱弾圧への日本の参加のもつ意味を検討し、みずからは戦争の原因をつくりださなかったシンガポールという地域における反乱を通して第一次世界大戦の全体像を探る手がかりとしたい。

1 第一次世界大戦とアジア

(1) インド兵—二つの役割

第一次世界大戦開始時に約15万人のインド人の戦闘員をかかえていたインド軍は戦争終了時には56万人の兵力を持つにいたり、戦争期間中80万人以上のインド人戦闘員と40万人強の非戦闘員が世界各地で任務に就いていた。¹⁾

アジアにおいても、青島占領に際し少なくとも中隊規模のシク教徒の兵士が参加している。²⁾『やまと新聞』は「北清事変」において「一等国の陸軍中日本軍に次で勇敢なる戦闘振りを見せた」インド兵（傍点は原文でアンダーライン）の「青島攻囲」における役割に期待を寄せていたし、³⁾『大阪朝日新聞』も「印度兵も青島攻撃—天津に残る潔しとせず」と題してインド兵の戦闘参加を伝え、「青島攻囲軍に加はれる印度兵は本月（十月）二十五日前進を開始し勇敢なる我軍と行動を共にするを喜べり」と戦線からのニュースを伝えていた。⁴⁾このように、第一次世界大戦中のインド兵には、植民地権益の獲得・擁護を目的とする戦争に参加して多大の犠牲を払う役割が担われていた。そして、その過程において日本軍と協力する場面も存在していたのである。ここには、第一次世界大戦の経験のうえにイギリスの掲げる民主主義の擁護という大義名分にも疑問を抱いた第二次大戦期のインド兵の意識との相違を指摘することもできよう。

しかしながら、この第一次世界大戦期にもインド兵を独立闘争への強力な援軍として期待する動きがインドの民族主義者達のあいだにすでにあらわれていた。カナダやアメリカに移住したインド人の労働者や農民の人種差別体験のうえに1913年に結成されたガダル党は、インドにおける武装蜂起を計画し、1915年2月にラーホールやフェローズプルなどの駐屯地において兵士の反乱を期待したが未遂に終わった。シンガポールにおける兵士の反乱がおなじ2月に起こっているのは偶然の一致であろうか。アメリカ大陸とインドを結ぶ海上交通の要衝であり、ガダル党員を乗せた何隻かの船が通過し、インド人移民が多く生活しているシンガポールがガダル党の動きから完全に自由であったとは考えにくい。

実際、1914年12月には、戦争開始時にシンガポールに移動していたマラヤ連邦守備隊（Malay States Guides）がドイツ領東アフリカに赴くことを拒否するという深刻な事態が発生していた。⁵⁾ ちなみに、この守備隊を構成していたのは多数がシク、残る35%程がムスリムの兵士であった。

(2)第一次世界大戦期の日英関係

1914年8月、日本は参戦した。この頃日英同盟下にもかかわらず日本の中国における「権益」の拡大をめぐるのは日英間に深刻な緊張関係が存在した。

しかし、シンガポールとその周辺地域の防衛にかんする限り、イギリスが日本の海軍に警戒の気持を抱きつつもこれに依存する状況は拡大していった。すでに、1914年3月、イギリスの海相チャーチルは、下院演説のなかで日英間の同盟の絆が依然として固いことを強調し、太平洋地域にかんしてイギリス海軍の弱さを日本の海軍力で補なわなければならないという「リアリズム」をのぞかせていた。⁶⁾ この年8月には、日本の参戦という情勢の変化、さらには海上交通をドイツの攻撃から守る必要から連合国の東洋艦隊の拠点の一つが香港からシンガポールに移された。⁷⁾ これに伴い、1913年3月に香港でイギリスの中国艦隊司令官に任ぜられたジェーラム中將もシンガポールに移ったが、日本を訪れ日英同盟の礼讃者となっていたという彼もまた弱体の英国艦隊を補完する役割を日本に期待していたのである。⁸⁾

1914年の後半、シンガポールの人々はドイツの巡洋艦エムデンの神出鬼没の動きに目を見張ったが、ドイツにたいする敵意を熱狂的に表わすことはなかった。逆に、エムデンは「民間人の乗組員や乗客を傷つけない」と伝えられ、捕えられたジュリアス・ラウテルバッハ中尉がシンガポールに連行されてきたときにはその戦闘振りを讃えられて英雄的ともいえる歓迎を受けるほどであった。⁹⁾ このような現実シンガポール駐屯のインド兵の戦争目的についての意識にも微妙な影響を与えたといえよう。

しかし、それはたんにシンガポールの住民やインド兵の意識にとどまらず大戦初期のシンガポールのイギリス当局や軍部指導層の意識にも重なるものであった。戦場への距離感とシンガポール内部の情勢にたいする楽観的な認識はシンガポール駐屯の軍隊を他地域に移動させる措置となってあらわれた。イギリス人兵士で構成されていたヨークシャー軽歩兵連隊はフランスに送られ、1915年2月16日にはシンガポール防衛の主力となっていた第五軽歩兵連隊も香港に移動する予定であっ

た。残るのは、乗組員80～90人規模の小型スループ船カドマス、シンガポール義勇隊、マラヤ連邦義勇ライフル隊、マラヤ連邦守備隊の一部、それに青島占領に参加したのち一時的に立ち寄っていた第三十六シク連隊の一部など極めて限られていた。

反乱の衝撃はそれだけにイギリス側にとって大きく、急遽連合国に援助を求めなければならなかったのである。

(3)大戦期シンガポールの日本人社会

ここで、反乱の経過にふれるまえに第一次世界大戦期のシンガポール、とくに日本人社会の変化についてのべておきたい。

1911年3月10日に行なわれた人口調査によると、海峡植民地（Straits Settlements）の居住者（軍隊を含む）は71万4,069人、うちシンガポール市部（Singapore Municipality）は25万9,610人、シンガポール地方（Singapore Country）4万3,711人、その他を合わせたシンガポール植民地31万1,985人であった。¹⁰⁾

次に、シンガポール市部に限ってみると、海外移民の多い中国人とインド人については、中国生まれの中国人15万5,132人、海峡植民地生まれ3万8,884人、中国人の合計が19万4,016人となるのに対し、インド人は、インド生まれ1万9,750人、海峡植民地生まれ4,214人、その他530人で合計2万4,494人である。¹¹⁾ 男女比率は中国人の場合約3：1、インド人の場合5：1で、海峡植民地生まれの人達が増大しつつあるとはいえ、依然として短期の移住者としての性格が強かったといえよう。他方、日本人の場合には、シンガポールの居住者は1,377人で、男486人、女891人と男女比率が逆転し、市部が女性にとっての稼ぎの場であったことを示している。¹²⁾

中国人とインド人の大部分は一時的な移住労働者で戦争の勃発に直接的な関心を寄せなかったが、政府の側では彼等のあいだに起こりうる大量失業、それに伴う社会不安を憂慮し、失業者には積極的に帰国を促がす一方で、中国とインドからの「三等乗客」の流入を禁止した。概して、アジア系住民は豊かな中国人とインド人の商人層を除くと戦争に格別の関心を抱かなかったといわれる。¹³⁾

また、1911年現在、シンガポールにはドイツ人181人、オーストリア人63人が居住していたが、「敵国」に属する彼等は戦争の影響を受け、予備役の者あるいは入隊可能な者はセント・ジョン島、のちにタングリン収容所に抑留され、残りの者は宣誓釈放の状態にあった。しかし、規制は形式的なものにとどまっていた。¹⁴⁾

全体として、シンガポールの社会は、第一次世界大戦が及ぼす経済的影響には敏感に反応し、ヨーロッパ諸列強間の対立については冷静に対応していたといえよう。この点では、大戦をアジアへの政治的発言権の強化と経済的権益の拡大の絶好の機会として利用しようとしていた日本の立場はシンガポールにおいても独自の行動をとることになった。

第一次世界大戦の勃発直後金融の閉息状態のために日本人のゴム園栽培に一時的な苦境が訪れることはあったが、大戦を通してみると、これまでささやかな商品を主としてマレー人あるいは日

本人向けに売っていた日本人商人はヨーロッパ貿易の激減を機会にヨーロッパ商人に取って代っていった。1903年4月にビーチ・ロードに医院を開業し、日本人社会の信頼を集めていた医師、西村竹四郎は、『シンガポール三十五年』のなかで「欧州戦争は飛躍日本の天与の機会であった」と記している。¹⁵⁾ 1916年9月の横浜正金銀行支店を初めとして日本企業の支店開設は急速に進んでいった。大戦中の日本人商店の増加は約78軒、その他の仲介業等を加えて1918年末における在留邦人の店舗は百十余軒に達し、戦前のほぼ三倍となった。¹⁶⁾ このことは、大戦期が従来の庶民型移民と平行して企業型経済進出が急速に進んでいった時期であることを明らかにしている。

シンガポールの反乱ののち、1915年9月12日にはジョホール州を含めて日本人会の発会式が行なわれた。当時、シンガポール在留邦人約1,500人、ジョホール州内邦人200余人といわれていた。日本人会理事22名のなかには、医師、歯科医各3名のほか、三井物産、乙宗、台湾銀行、日本郵船などの商店・企業の代表、ゴム栽培業者が含まれていた。¹⁷⁾

このようなシンガポールにおける経済的利益の拡大のためにも「邦人の風紀刷新」が必要となった。そのことにふれてシンガポールにあって『南洋新報』、のちに『南洋日日新聞』の記者の眼で見てきた佃光治は第一次世界大戦のさなかに次のようにのべている。¹⁸⁾

「邦人の地位は向上した。政治にも、商業にも、農業にも邦人の勢力は発展した。而も尚土人をして邦人男子の総てが女郎屋のアニシャマと思はしむるは、直ちに真面目なる邦人活動の支障となる。職業的軽侮の觀念を彼等土人の頭より一掃するの必要は焦眉の急務となって來た。」

「からゆきさん」の追放は「経済発展」の論理の帰結であった。日本の領事館はまずイギリス当局に働きかけて1913年に彼女達のブローカーである嬪夫を追放させ、1920年には娼家を閉鎖させた。¹⁹⁾

2 インド兵の反乱

(1)反乱についての研究史

シンガポールの反乱については、シンガポールとマレーシアのほかインドにおいてガダル党運動史研究の一環として注目を集めてきたことはすでに指摘した。従来、インドにおける研究の主要な手引き書となってきたのはジョージ・マクマンの書物であり、¹⁾ ヒンディー語やパンジャービー語で書かれた文献もこれに依拠している。²⁾ しかし、同書は反乱の過程をきわめて簡潔に整理しているとはいえ、反乱の原因や反乱をめぐる国際的環境の分析は不十分である。また、これまでのインドにおける研究は一般に反乱にたいするガダル党の影響を重視するという特徴を備えているものの、この運動の最前線にあった活動家と反乱兵士がどこで接点を持ったかについて未だ明らかにされていない。

この点で、1950年代前半に書かれ、当時のマラヤ大学に提出された未公開のモスベルゲン論文は、公文書類に接しえない段階に主として新聞に依りながら反乱の原因と過程を考察した最初の本格的な研究といえる。とくに反乱の過程についての慎重な推論の手続きがこの論文の長所をなしている

が、反乱を鎮圧した側の能力と人種を超えた協力による鎮圧の意義にたいする評価があまりに高く、反乱者の意識の底にあるものを捉えていないことが決定的な問題点として残された。³⁾

公文書類、とくに海峡植民地当局とイギリス政府とのあいだの交信を集めた CO 273 シリーズの公開ののち、反乱研究は深まった。1973年にシンガポール大学に提出されたオン論文はこの史料を利用した最初のものである。その後、シンガポールとマレーシアで書かれた多くの論文でこのシリーズが引用されている。ターリングの論文およびハーバーとミラーの共著はロンドンで利用しうる公文書類に反乱の基本的な構造を求めた研究の到達点を示すものであろう。ターリング論文では史料に圧倒されて著者の意図が見えにくい、これまで未公開の論文では指摘されていた日本の反乱への介入の意味を改めて検討している。⁴⁾ 他方、ハーバーとミラーの共著は、新たにイギリス人の回顧をも加えてシンガポールにあった軍幹部とイギリス人居住者の狼狽と冷静な対処に興味深く描いている。しかし、ここでもイギリス側資料に全面的に依拠したために反乱者側の分析は手薄であり、ガダル党、あるいはその創設者ハル・ダヤールの反乱にたいする影響の叙述は十分な論証を欠いている。⁵⁾

このように、反乱研究史を回顧するならば、1950年代にモスベルゲンによって描き出された反乱像は、その後のイギリス政府資料の公開によってむしろ補強されているとすらいえよう。本稿は、反乱後のシンガポールの情勢にも注目しながら、1915年のシンガポールをより広いアジアの近代史のなかでとらえなおし、反乱そのものにも新しい視角を求めようとするものである。

(2)反乱の過程

第五軽歩兵連隊の前身の誕生は、1803年のカンプル（インド）にまでさかのぼる。その後、隊の編成が変り、入隊する兵士の出身部族や宗教も付表のようなものとなった。この連隊を指揮するイギリス人將校を除いてすべてムスリムで構成され、G 中隊の若干名を除いては当時のバンジャープのヒサル、ロータク、グルガンオ、カルナールの出身である。⁶⁾ 同連隊がインドの中央州の駐屯地ナオガンオを離れてシンガポールに移動したのは1914年の前半であった。

反乱が起こったのは1915年2月15日であり、シンガポールは前日から中国の暦の新年の三日間の休日に入っていた。

アレクサンドラ兵営に駐屯する第五軽歩兵連隊は16日に香港に移動することになっており、15日朝8時にライダウト海峡植民地司令官が連隊の最後の閲兵を行なったときには兵士は「乱れていない」と感じている。この日の午後、H. S. エリオット中尉が12名の兵士を連れて弾薬庫に行き、翌日の移動に備えて弾薬を貨物自動車に載せ出発の用意をしていたとき番兵詰所の方から兵士イスマーイル・カーンが発砲した。午後3時、反乱への合図である。次いでA中隊が自動車を、B中隊は弾薬庫を襲い、その後C、D両中隊の兵士も反乱に加わった。周囲に人の叫びと発砲の音が響きわたった。この時間はイギリス人將校の午睡のときである。エリオット中尉はマラヤ連邦義勇ライフル隊のいるノーマントン兵営に助けを求めに行く途中で殺害されている。連隊長のマーチン中佐は部下からの連絡で反乱を知り、軍司令部のあるフォート・カニングに緊急事態を知らせたが、

その電話もまもなく切断された。⁷⁾

反乱兵のうち、ドゥンデー・カーン^{スベグール}大尉を指導者とする約150人のグループは、アレクサンドラ兵営の南端にいるマラヤ連邦守備隊（砲兵隊のみ）に向かい、反乱への参加を促がした。反乱に参加しなければ射殺という威嚇に武器・弾薬を受け取ったが、大部分の者はジャングルに逃げこみ、のちにイギリス側に降伏した。⁸⁾

その後の反乱兵士達の向かったコースは大きく三つに分けることができる。⁹⁾

第一のグループは約80～100人からなり、2マイルほど離れたタングリン収容所に向かった。ここにはシンガポール在住のドイツ人およびエムデンの乗組員が約300名収容されており、反乱勃発時にはシンガポール義勇ライフル隊とジョホール軍が警備に当たっていた。反乱兵は4人の將校（3名のイギリス人と1名のマレー人）、7人のイギリス人と2人のマレー人の下士官ならびに兵士、そしておそらくは散弾によって1人のドイツ人を殺害した。¹⁰⁾ 彼等がドイツ人を自由にしたときドイツ人は不安におののき、反乱に同情的とはいえなかった。また、反乱兵が武器・弾薬を与えて反乱の指導を求めようとしても、指導者格のラウテルバッハはこれを固辞した。ドイツ人側が反乱の成功の見込みなしという判断を下すにあたっては医師ウィリアムスの助言の影響も大きかったといわれている。¹¹⁾ 反乱軍の側にドイツの援助を期待する気持ちが強かっただけに、その拒絶は運動の方向を見失なわせる衝撃を与えることになった。

もっとも、自由の身になったドイツ人はこの機を逃さず、反乱軍がひとたび退いたのち17～19人が収容所を脱走し、数人を除いてはこれに成功した。そのなかにはラウテルバッハも含まれ、彼はマラッカ海峡を渡ってスマトラに逃げている。また、シンガポールにあったドイツの商会ベン・マイヤーのA. ディーンほか2名も脱走者のなかにあった。収容所の内部ではドイツ人は自分達の脱走用のトンネルも掘っており、反乱以前に彼等が警備に当たった第五軽歩兵連隊の將校・兵士と接触し、反乱の計画を語ったにせよ両者の認識のずれは埋めがたいものであったといえよう。

ちなみに、タングリン収容所の近くにいた第三十六シク連隊は、弾薬を携帯していなかったためその夜は植物園に退き、翌日に弾薬を支給されて反乱鎮圧の勢力に合流した。

このほか、タングリンに向かった反乱軍から分れたとみられるいくつかの小集団が民間人を含むイギリス人を殺害し、その一部は中央警察署においてシクの警察官二名を傷つけている。インドのジャーナリスト、クシュワント・シンとサティンドラ・シンは蜂起にはシク対ムスリムの「コミユナルな色合い」が付されていたと述べている。¹²⁾ 問題の提起はむしろ、コミユナルな中隊編成を取った兵士達が反乱の過程で「コミユナルな色合い」を克服することができたかという形でなされるべきであろう。

第二のグループは、チシュティー・カーン^{ジャマーダール}中尉の指揮のもと、市内からの鎮圧勢力が来るのを防ぐためパシール・パンジャン・ロードの方向に向かった。しかし、やがてカドマスの乗組員と交戦した彼等はアレクサンドラ兵営への撤退を余儀なくされ、チシュティー・カーンは負傷した。撤退と指導者の負傷もまた反乱兵側に深刻な精神的動揺をもたらすことになった。¹³⁾

一方、アレクサンドラ兵営は残る反乱兵達の拠点となり、イギリス人將校をも殺害した。しかし、マーチン連隊長のバンガローの包囲・急襲は思ったようには進まなかった。スミス大尉の指揮するマラヤ義勇ライフル隊がまず到着して防衛に廻り、15日夜には探照燈の光が反乱兵の動きを封じたからである。16日未明、C. W. ブラウンロー中佐指揮下の兵力が抵抗に遭遇しながらバンガローに到着し、孤立していた人達を救出した。

しかし、不満の存在は部分的に認められていたものの、予期しなかった反乱がイギリス側に与えた衝撃は大きかった。反乱は市の中心部から遠くない所で起こり、市街の一部に及んでいた。ヨーロッパ人の婦人や子供は碇泊中の船に避難を命ぜられ、15日午後6時半には戒厳令が敷かれた。近海にあった連合軍の船には無線で援助が求められ、インド総督にも軍隊の派遣を促がす電報が送られている。当面、イギリス側は雑多なグループからなる少数の兵士や義勇隊を巧みに繋ぎ合わせて対処していかざるをえなかった。15日の午後7時にはスルタン自身の指揮するジョホール軍も到着した。日本の領事館にも義勇隊の結成が要請されたが、これに即応したシンガポール在住の日本人は「^{ナショナル}国民」としてよりも「ナショナリスト」として行動し（ヤング総督の表現）、「彼等（日本人）の自分を抑えた能率は熱したヨーロッパ人の雑多な集まりと比べていちじるしく対照的」という印象を周囲に与えた。¹⁴⁾

16日になると、反乱軍の劣勢は決定的となる。シンガポール義勇ライフル隊がタンダリン收容所を15時間ぶりに回復した。17日にはフランスの巡洋艦モンカルムと日本の巡洋艦音羽が入港した。18日にはブラウンローの兵力が音羽の陸戦隊80名に補強されてアレクサンドラ兵営を奪回し、次いで日本軍はノーマントン兵営へと移動した。こうして、その日のうちにもはや「軍事情勢」はなくなったという報告がなされている。以後、周辺地域の「掃蕩作戦」へと事態は移る。18日にはモンカルムへの無線を傍受して急を知ったロシアの巡洋艦オリョールが入港し、¹⁵⁾ 19日には日本の巡洋艦対馬も到着した。ロシア軍は25日に至近距離からの発砲を受けた二人の負傷者を出している。また、日本の二隻の船が上陸させた將校・兵士は160名である。20日にはイギリスのシュロップシャー軽歩兵連隊もラングーンから駆け付けた。

2月下旬から3月初めにかけて各国の艦船および義勇隊にたいするイギリス側の感謝の式典が催されている。3月17日、ヤング総督は、最終報告として、マラヤ連邦守備隊2名、第五軽歩兵連隊の9名の行方不明者を除き、56名を反乱者側の死者または逃亡の際の溺死者の総数として打電した。¹⁶⁾ また、反乱軍以外の死者は、ハーパーとミラーによれば、軍人22名、民間人19名（内訳、ヨーロッパ人13名、中国人3名、マレー人2名、ドイツ人捕虜1名）の計41名である。¹⁷⁾

2月23日には軍法会議が始まり、最終的には202名が裁判にかけられ、2名のインド人將校（ドゥンデー・カーン、チシュティー・カーン）を含む47名が死刑執行され、64名が終身流刑、73名が7～20年の流刑、12名が1～5年の重禁錮刑、5名が1ヵ月から2年の軽禁錮刑を言い渡され、マラヤ連邦守備隊の11名にも11ヵ月から2年の軽禁錮刑が宣告された。¹⁸⁾

死刑を宣告された者は絞首刑の1人を除いては銃殺刑を受け、その大部分の者はアウトラム・

ロードの監獄の外の空地で1890年代以来という公開の死刑に処せられた。シンガポールの英字紙『ストレイツ・タイムズ』紙は、この処刑を見るために集まった人々について「主としてアジア人で構成された群衆はきわめて行儀よく、…その沈黙と熱心さはこの手続きに深い印象を受けたことを示唆している」とのべたが、ライダウト司令官は、公正に裁いたというのが現地の人々の意見であり、若干名のシクが示した怒りはたんなる虚勢にすぎず、パンジャブ・ムスリムのあいだのある程度の同情は予測していたものであると書き送っている。¹⁹⁾ この残酷な公開処刑が沈黙の影で複雑な波紋を揚げたことは否定しようもなかった。

4月1日に処刑の場面を見た西村竹四郎は「輪廻転生を信ずる彼等だけ、死に際は誠に立派で、市中の評判は虚伝ではなかった」と伝えているが、²⁰⁾ インド兵の態度を賛えながらも兵士との距離は縮まってはいない。

一方、この処刑方法について、『やまと新聞』はイギリスの対インド政策にたいする批判の一環として次のように言及している。²¹⁾

「新嘉坡反乱の首謀者を刑するに方り、英国政庁が公衆の面前に於て、彼等を銃殺したりしことは、新嘉坡に在る回々教徒の著しく憤激せることは、又実に印度に住む六千七百万人の同じ教徒の感情ならざらんや。」

公開処刑は、反乱者にたいする見せしめとシンガポールのアジア系住民にたいする警告以外のものではなかった。換言すれば、イギリス側が抱いた危機感の深さを反映している。インド兵のあいだの不满について散発的な情報をイギリス側が把握していたにせよ、このような規模での反乱は予測していなかった。それだけに、彼等は、反乱軍内部の指導層形成の不十分さとドイツ人捕虜にたいする一方的な期待にあらわれた反乱の構想の未熟さに救われ、アジア系住民の反乱にたいする「無関心」によって助けられたのである。市街の一部にまで及んだこの反乱は、イギリス側を利したこれら条件の一つでも異なっていれば市の中心部にまで及ぶ可能性が十分に存在していたといえる。

反乱以後、ムスリムを含め、シンガポールの有力な商人層などがイギリスへの忠誠を改めて表明し、住民が「何事もなかったかのように」日常の生活を続けたのも事実である。しかし、当時戒厳令体制下にあったこと、兵士と市民とのあいだの公然たる呼応がみられなかったにせよ忠誠の表明と底に沈んだ民衆の思いとは別のものであったことが指摘されなければならない。

明らかに、反乱はイギリス植民地支配体制におけるシンガポールの位置を見直す直接的な契機となった。さしあたり、イギリス側は、ヨーロッパ人に依拠する防衛体制を強化し、シンガポール在住のシクの義勇隊結成の申し出をも斥け、²²⁾ 植民地支配を批判する文献の流入にたいする監視を厳しくした。

(3)反乱の原因

イギリス側は2月20日に調査委員会を設立し、その報告書は5月に提出された。そこにおいて反乱の主要原因は第五軽歩兵連隊の規律の緩みに求められた。「秩序」の維持に関心を抱く立場からの当然の結論ともいえよう。報告書では、連隊長マーチン中佐が事なかれ主義で部下の信頼を欠き、

イギリス人將校達は規律を無視するかのように振舞い、互いに言葉も交わさない状態にあったことが指摘されている。このような対立はインド人の將校や兵士のあいだにも周知の事実で、マーチンはむしろ「兵士の味方」を装っていたという。また、インド人將校のあいだでも、とくに「右翼」の將校間には深刻な反目が見られ、それぞれの將校が一般兵士の支持グループを抱えてこむという状況にあった。「左翼」、すなわち「忠実なる翼」でも決して満足な状態ではなかったといわれている。このような連隊の体質がいかなる種類の宣伝にも左右されやすいとされたのである。²³⁾

現在、反乱の原因には三つの要素が挙げられている。第一の原因は、1914年11月からイギリスがトルコと交戦状態に入ったため、バンイスラミズム、ないしは親トルコの感情がインド人のムスリム兵士のあいだに浸透し、イギリス側の一員としてトルコと闘うことを望まない空気が強まったことである。第二は、武力によるインド独立を目指し、インド軍に期待を寄せたガダル党運動の影響が第五輕歩兵連隊に及んでいたと考えられることである。第三は、タングリン収容所のドイツ人捕虜が脱走のために兵士達を利用しようとした点である。おそらく、反乱はこれら三つの原因の合成のうえにうまれたと思われるが、²⁴⁾ とくに、基本的原因と考えられる第一と第二の要因のかかわり方がこれまでの所明らかにされていない。このことが、限られた事実またはその推定からいきなりバンイスラミズム、ないしは、ガダル党の革命精神へと飛躍する議論をうみだしてきた。他方では、そのような論理展開への躊躇が、逆にイギリス人將校間の対立、そしてその結果としてのインド人の將校・兵士間の対立という確実に存在した事実に原因を求めさせ、延いては、良きイギリス人將校がいたならばこのような反乱は起きる余地はなかったという支配の論理にも道を開いてきた。²⁵⁾

そこで、改めてこの三つの原因がどのように作用したかを検討しておきたい。

第一は、イギリス・トルコ間の敵対がムスリムの將校・兵士を動揺させた点についてである。

シンガポール在住のムスリムとして兵士達に働きかけた人物の一人に、インドのスーラト出身の商人で熱烈な親トルコ派であったといわれるカーシム・イスマーイール・マンスールがいる。彼は第五輕歩兵連隊の兵舎をしばしば訪れ、兵士達も彼の住居に出かけていた。彼が逮捕されたのは反乱前月の1月23日であり、その理由は彼がラングーン在住の息子宛の手紙のなかにマラヤ連邦守備隊の二人の名を使って書かれたトルコ領事宛の書簡を同封し、そこにおいてイギリスと闘うため兵士を派遣したいのでトルコの船をシンガポールに送ってほしいと要請していたからである。この手紙は官憲の手に抑えられ、のちにマンスール自身手紙を書いたことを認めたといわれる。オン論文は彼がマラヤ連邦守備隊の遠征拒否にかかわったと信じられていることも指摘しているが、モスベルゲン手紙が書かれた時点ですでに守備隊の大半が遠征拒否のためにタイピンに移されていることから彼の働きかけの対象としての第五輕歩兵連隊の可能性をも推定した。しかし、ターリングはマンスールと連隊との関係にかんする証拠は薄弱であると断定している。²⁶⁾ ともあれ、マンスールの行動が兵士達のトルコと闘いたくないという気持ち、あるいはひろく厭戦気分を醸成する一因となったことは否定しがたい。彼は1915年5月31日に国王にたいする反逆の罪で死刑となった。

マンスールとともに注目されるのが、カンポン・ジャワ・モスクを拠点とした導師ヌール・アラーム・シャーの活動である。彼は革命派（ガダル党）に属し、インドに帰るグループによって資金調達のためにシンガポールに残されたといわれている。モスクにはインド人の將校・兵士—そのなかにはチシュティー・カーンも含まれていた—がしばしば訪れてイギリスにたいする決起を説くイマームの話に耳を傾け、反乱時には彼は反乱の「首謀者」の一人イムティアズ・アリーほか数名の兵士を匿まっている。²⁷⁾

また、第五軽歩兵連隊がシンガポール各地に分散していたことも外部—「煽動者」が入ってくる港や市街—の影響にさらされやすかった理由とされている。イギリス劣勢の「戦況分析」は連隊内の恰好の話題であったが、それはブラニ島の任務に就いていたチシュティー・カーンが兵士に吹きこんだ内容でもあった。このような話題がインド人兵士のあいだに浸透していく心理状況に注目しなければならない。

これと関連して、タングリン収容所に抑留されていたエムデンの乗組員、とくにラウテルバッハが2月初めから兵士達に反乱を唆かし、歩哨の兵士に金銭を与え、ムスリムのポーズすらとっていたと伝えられている。²⁸⁾ 当時、収容所のドイツ人と反乱前に警備に当たっていた第五軽歩兵連隊の兵士との接触は容易であり、そこにも英独戦にたいするシンガポールのイギリス軍当局の距離感をうかがうことができる。ディーンに至ってはイギリス高官の出席する集まりに招かれるほどであった。²⁹⁾ たしかに収容所の扉が反乱兵によって開かれたときドイツ人の彼等にたいする態度は冷やかであったが、それは一人のドイツ人捕虜を含む多数の死者を出す発砲の直後であり、また、ドイツ人達の目的があくまで脱走にあって、反乱の指導ではなかったからである。ドイツ人捕虜がシンガポールにおける戦争観を巧みに利用し、ムスリムの兵士に働きかけたことは、反乱の第一原因ではなかったが、反乱への道に側面から拍車をかけることになった。

ところで、シンガポールはアメリカ大陸からインドに向かうガダル党員達を乗せた船の経由地であった。かの有名な駒形丸も1914年9月16日に寄港し、乗客の下船は許されなかったものの19日まで港に碇泊していた。³⁰⁾ ヤング総督は、調査委員会の報告書を本国に送る手紙のなかで、「駒形丸の通過は…船が地上との連絡を取らなかったにしても悪い結果を残した」³¹⁾ とのべている。海峡植民地の最高責任者の言葉であるだけに痛恨の思いが込められている。

シンガポールは、ガダル党運動のための資金調達の場となり、兵士への反乱の呼びかけも行われたといわれているが、その全容はいまだ明らかではない。例えば、1915年9月のメダン（スマトラ）からの報告として、1914年12月、シクの宗教指導者ヴィール・シンがメダンからシンガポールに向かい翌年1月初めまで滞在して、2月の反乱の指導者達との会合に参加したのではないかという推測が加えられている。³²⁾ この種の情報は他にも存在する。

なかでも注目されるのは、1914年12月、マラヤ連邦守備隊がアフリカ遠征を拒否するまえに、海峡植民地司令官リードが受け取った手紙の内容であろう。発信人をただ守備隊員としたこの手紙は、海外遠征が隊の条件に反するとのべたほか、次のように自分の立場を明らかにした。³³⁾

「駒形丸事件で射殺された同胞が我々を悩ませ悲しませている以上—ある者は愛する兄弟やその他の血縁の者を失っている—、我々は（英領）インド政府の親切を決して忘れることはできない。彼等は、インドで職を失ない、アメリカで金を稼いで良い生活を手に入れようと望みながらその地を追われ、上陸も許されずに帰って来る者を、煽動者とみなして母国に上陸することも認めず射殺するのである。自分の土地を自由に歩く権利のないとき、他国で我々に何を望むのか。自国で惨殺されているとき、他国からまともな取り扱いを期待することはできない。それ故、我々は協定書に挙げられている以外の国の戦闘には出て行かないと強く告げたい。」

この手紙について、マラヤ連邦守備隊のリーズ隊長は、兵士の遠征拒否は「政府を困らせたいという動乱への願望からではなく、恐怖に由来する」とし、手紙は連隊外の者によって書かれたものであり、「連隊内の兵士の感情を代表してはいない」と判断している。しかし、アメリカ（ガダル党？）からの煽動的な文献が郵便で兵士のもとに送られてきていることも認めた。ここには、明らかにインドの独立運動と兵士の厭戦気分との結合が存在したのである。そして、マラヤ連邦守備隊の遠征拒否とタイピンへの撤収はシンガポールに残る第五軽歩兵連隊の兵士に深刻な影響を与えることになった。

マラヤ連邦守備隊の遠征拒否から第五軽歩兵連隊の反乱への過程をみると、すぐにもヨーロッパの戦場に出て「武勲」を立てたいというイギリス人將校とは対照的に、シンガポールにあったインド人將校や兵士のあいだでは、戦場の恐怖にもましてヨーロッパにおける戦争の積極的な意味を切実に感ずることができなかったことが知られよう。そこに、ガダル党の宣伝が訴えるインド独立への訴えが彼等のあいだにより鋭い反応をひきおこす要因があった。そのうえに、イギリスとトルコとの戦いは、彼等のトルコ国家観がどのようなものであったにせよ、彼等にとっての戦争の不毛性を意識の底にまで浸透させたのである。ここにこそ反乱の原因があった。

従来、反乱の原因論は、ハーバーとミラーの近著を含めてあまりにイギリス人將校間の対立、なかなかずくマーチン連隊長の性格分析の周辺をめぐる語られてきた。そのことは、反乱の指導者を型にはまった悪役として描き出すこととなり、まして一般兵士の戦争意識にさかのぼって反乱を考えるという視点はきわめて稀であった。

最後に、反乱の直接的契機について触れておきたい。

一つは、2月15日の朝の閲兵ののち、昇進試験のために連隊の「左翼」グループだけがその場に残され、中尉への昇進が有力視されていたA中隊のイムティアズ・アリーがその機を失ない、「右翼」グループに強烈な不満をうみだしたことであり、彼に近かったチシュティー・カーンやドンデー・カーンがこの機会を捉えて兵士を反乱へ仕向けたとされている。

また、この日の挨拶で、ライダウト司令官が移動する連隊の目的地を明言せず、このため兵士達はヨーロッパの戦線に送られるのではないかという不安を一層強めた。マーチンが連隊に香港行きを告げたのは13日であったが、チシュティー・カーンは我々の船はシンガポールを離れたならば沈められると煽っていたという。³⁴⁾

報告書も指摘するようにこれらは反乱への火花の役割を果たしたが、反乱の底流に存在したのは兵士達の戦争観そのものであった。たしかに、第五軽歩兵連隊は並の軍隊であったかもしれないが、それ故にこそ青島占領に参加したインド兵やヨーロッパの戦線で犠牲を払ったインド軍とは異なる世界戦争観を示すことができた。反乱兵の計画性の欠如やドイツ人捕虜への期待の甘さを指摘して済ますことのできない問題がそこにある。もちろん、インド独立への思想的準備が整っていなかったことも事実である。しかし、それは、たんに反乱を起こした兵士達の問題であるにとどまらず反乱に対処したアジア系住民の当時の状況にもかかわっていた。

3 反乱と日本人

(1) シンガポール日本人社会の反応

2月15日夜9時半頃、日本領事館の藤井領事は、シンガポールにおける反乱についてイギリス側からの連絡を受け、11時には総督から直接電話で邦人義勇隊（イギリス側の表現は Special Constables）募集の依頼があった。領事が総督官邸に赴く一方、すでに緊急の事態を知っていた日本人二十数名が領事館に集まったが、そのなかには駐在武官荒城少佐の姿もあった。そして、日本側は以下の条件を基礎として義勇兵の要請を受け入れた。¹⁾

- 1 義勇兵を日本人の予備陸軍將校の指揮下に置くこと
- 2 日本の軍艦が陸戦隊を上陸させるまでを期限とすること
- 3 死傷者が生じた場合イギリス人義勇兵と同等の待遇とすること
- 4 糧食その他の実費はイギリス側の負担とすること

また、義勇兵の任務を市街の警備に限定し、前線に出さないことも確認された。二回にわたる義勇兵募集の結果186人の義勇兵が選ばれ、その指揮者にはシンガポールにある日新ゴムの支配人で予備中尉の和田義正が当ることになった。彼はこの年9月に創立された日本人会の理事にも選出されている。義勇隊にはイギリス側から銃器・弾薬類が支給された。

義勇兵募集にたいする反応の早さにかんして、15日夜に領事館に詰めていた西村竹四郎は「日本人は気が早い、カッと呼べばツと応へる。翌暁六時迄に義勇兵応募者は百二三十名に達した」と回顧している。²⁾ 問題は、「日本人氣質」を通してあらわれた日英同盟という政治的回路の即応性と、判断の基礎としてそれ以外の有効な情報を利用しえなかった事実の持つ意味であろう。

義勇兵の構成について、藤井領事の報告書は、「元來邦人義勇兵ノ大部分ハ僅ニ銃ノ操縦位ヲ心得居ルニ過キス…且ツ彼等ノ多クハ所謂内地ノ南洋熱ニ驅ラレテ当地方ニ渡來シタル者又ハ濠洲ブルーム Broom 地方ヨリ逐ハレ來レル真珠業者等ニシテ差当リ衣食ニ窮シオリシ者ノミナルニモ拘ラス咄嗟ノ際ニ一々充分ニ身元調ヲナスノ^{いとま}違ナクシテ徵募シタルモノ」とのべている。³⁾ ただ、任務に就いた者の多くが長期滞在者ではなかったにしても、義勇兵要請に応ずる判断を下したのは領事館とシンガポール社会の経験を積んでいる日本人であった。

シンガポールの多数人口を構成していた中国人社会においても、第一次世界大戦の開始後義勇隊

が誕生し、インド兵の反乱に際して反乱兵の追跡や捕虜の見張りなどに当り、また住民の一部が反乱兵を逮捕しイギリス側に引き渡したことも、中国人キリスト教徒協会の会長となったソン・オン・シャンの自伝などから知ることができる。⁴⁾ また、中国人のサーバントが、ヨーロッパ人が避難しているあいだ彼等の貴重品類に手も触れず、帰ってくればいつものように早速食事を用意したということも伝えられている。⁵⁾ シンガポール在住の中国人、マレー人、インド人がそれぞれ反乱の鎮圧に一定の役割を果たしたことは否定できず、その「団結の精神」(esprit de corps)を高く評価する見方も存在する。ただ、日本の場合には、義勇隊とはいえ国家を直接的背景としている点で他のアジア人社会とは異なっていた。

当初、ライダウト司令官は同意された条件と異なりイギリス側兵士の手薄さを補うために日本人義勇兵をパシール・パンジャン地域の前線に送るよう提案したが、この案は日本側の抗議で撤回されている。さきの報告書では、市街の警備に就いた義勇兵について、市の南端にある中央病院を襲ってきた「暴徒」を斥け、投降者十数名を捕えて「一般内外人殊ニ病院ノ医員並患者ノ深キ感謝ヲ受ケタリ」と記されている。また、同報告書には、領事が和田指揮官を通し義勇隊員にたいし「必要ヲ越エテ猥リニ暴徒ヲ殺傷スルコトナク可成ンハ彼等ヲ生擒スルノ手段ヲ取ルヘキ様内々論達シタ」ことも指摘されていた。

日本の巡洋艦がシンガポールに到達していた21日には義勇隊の解散式が行なわれた。日英同盟の要請に沿いながらも独自の指揮の下に警備に当り、集団としての規律を他のアジア人社会に強く印象づけた義勇隊の行動は、国威発揚の舞台をつくりだしたが、インド兵を「殺傷スルコトナキ」よう努めながらも反乱の底流にあるものを汲み取ることは難しかった。

(2)日本海軍と反乱

一方、ジェーラム司令官の支援要請を荒城少佐からの発信で知った日本の第三艦隊は、巡洋艦の音羽を17日の午後6時に、対馬を19日の午前11時11分にシンガポールに入港させ、とくに音羽の陸戦隊はアレクサンドラ兵營の奪回でイギリス側に協力した。⁶⁾

しかし、日英同盟にもとづく協力要請にたいする対応をめぐるでは海軍の側に躊躇した可能性のあることが佃光治によって指摘されている。彼によると、第三艦隊司令官の土屋光金少将が入港後直ちに上陸を求められたのにたいし、一度はこれを拒絶したが、その理由は、

「日英同盟条約は彼我の内乱に関係すべきものではない。曾て台湾土民反乱当時基隆碇泊の英艦某號は之が援助を拒んだではないか。新架坡在留の帝国臣民が危胎に陥らんか、直ちに之が救援に努力すべきも、英国臣民たる印度人の騷擾に關与すべきでない。強ひて帝国の力を藉らんとならば国家的の報償条件を付せよ」

というものであり、総督の懇請の結果援助を承認したといわれる。佃はこの説について「信偽^{ママ)}固より定かならねど、予はその事実なるを信ずるのである」⁷⁾とのべている。

第一次世界大戦の前から台湾では抗日反乱が続発していたが、どの時点で日本がイギリスに援助を要請したのか現在のところ明らかではない。また、土屋発言といわれるものについて他の資料で

確認することも難しく、土屋司令官の座乗する旗艦対馬の入港日にかんする佃の誤認もある。対馬の入港は19日であり、むしろ音羽入港に際してのジェーラム司令官來艦時の「懇望」の中味、あるいは入港後に音羽の森本艦長が藤井領事とともに総督を訪ねたときの会話の内容がかかわっているのかもしれない。⁸⁾ おそらく、佃説はその周辺から流れた情報をとらえたものと思われる。説の真偽はともかく、少なくとも海軍の内部にイギリス帝国の「内政」にたいする介入に躊躇の雰囲気があったこと、および、日本の植民地権益の擁護と結びついた形においてではあるが義勇隊編成の即応とは異なる対外認識と作戦行動のリアリズムが存在していたことを推測させる。なによりも、佃の指摘は台湾の抗日反乱とシンガポールにおけるインド兵の反乱を切り離しては理解できないという現代史的な発想をはからずも表現している。

ところで、藤井領事の報告書のなかにも土屋司令官の慎重な判断を示唆する次のような文章がある。⁹⁾

「土屋司令官ハ陸戦隊員ニ対シ特ニ注意ヲ与ヘ印度兵ニ対シテハ吾人何等ノ遺恨アルニアラサルニ付当方ヨリ好テ彼等ヲ殺傷セス可成投降セシムルノ手段ヲ取ルヘキ様内訓シタル由ナルカ幸ニシテ彼我共ニ殺傷ナク暴徒約二十名ハ安心シテ我軍ニ投降シタルモ英国兵ニ引渡サルニ及ンテ投降者ハ一斉ニ意外ノ感ニ打タレ同時ニ英兵ニ対シ嫌悪ノ態度アリシト云フ」

ここでも、音羽陸戦隊によるアレクサンドラ兵営奪回時の捕虜が12名、21日までに日本軍によってさらに捕えられた者10名であり、土屋司令官の上陸が19日であったことを考慮するとき、内訓がどの段階で出されたかにも注意しなければならない。『戦時日誌』にはそれを暗示させる文面は存在していない。土屋司令官の訓令が事実とすれば、それはその職にあった者に可能な選択肢のなかのもっとも妥当な道ともいえ、佃記者を含めた日本人社会の当時の「土人」感とは異質のものが感ぜられよう。しかし、日露戦争以来日本の「ナショナリズム」に鼓舞されてきたインドの民衆から見れば、「安心シテ」投降したインド兵がイギリス側に引き渡されるのを知ったときの「意外ノ感」は1905年以来の日本への「信頼感」の崩壊を意味していたのである。

しかし、このイギリスへの軍事的加担のもつ歴史的意義を佃光治は明確に自覚していた。¹⁰⁾

「此騒動に於て、我援助の為に、英人の態度は確かに一変した。表面のみにても吾々に敬意を拂ふようになった。支那人や、馬來人の態度も変った。総ての人種が日本人の前には道を譲った。此時程吾々が肩幅広く感じた事はない。

然し、日本人を東洋の覇王として尊敬し、信頼してゐた印度人は何ういふ感情を持ったであらう。日本人頼むに足らず、日本人も吾々の敵であると印度人は思はないであらうか。これと同時に縦令一時的にもせよ、英領土の一部を占領して、新架坡島の中央に日章旗を立てたといふことは何を意味するであらう。アレキサンダー・バラックは新架坡島の中心地である。新架坡は南洋の中心地である。」

佃の書物のこの部分は発行された翌年には英訳されて、イギリスの軍・外務・情報関係者のあいだに回されていた。¹¹⁾

1915年という年は、日中関係にとってのみならず、日本とシンガポール、日本とインドとの関係の歴史における転換点に立つ年であった。

(3)反乱後の日本の世論

シンガポールにおける反乱にたいする日本の受けとめ方には二つの立場があった。

一つは、青島占領後の中国における「權益」をめぐる日英間の緊張関係のなかで日本の立場を強化し、あるいは見直すために反乱鎮圧における日本の役割を強調しようとする視点である。反乱後の比較的早い時点で『やまと新聞』は「然り、日本の武力にして今日以下ならば、東亜の平和は十分に保証せられざるべし、新嘉坡に於ける印度兵反乱の如き、現に一顧の価あり」と書いていたし、¹²⁾ 大戦期後半に入っても、日印協会会頭で前首相の大隈重信は、1917年11月、協会の総会の席上、「日本の艦隊は同盟の誼を以て、英国を援助する事決して慚くないのである。…彼の新嘉坡に於けるマホメット教徒の乱に当って、日本の艦隊がどの位努力したか。新嘉坡だけでは何んでもないかも知れぬが、是が印度に反響する事大なりと思ふ」と誇示していた。¹³⁾ 日本の軍事力によってアジアの安全が保たれているという自負がそこにある。

第二の立場は、シンガポールの反乱および1915年末におけるインド人革命家の日本からの追放問題によってインドの独立運動にたいする関心を引き起こされ、反乱弾圧への加担がイギリス帝国の「内政」に介入してイギリスを利し、インドの民族主義者の運動に打撃を与えたのではないかと自省する立場である。この立場をとる論者も日英関係の認識については第一の立場と共有する部分をもっていた。

第二の立場を反映させたものとして、例えば、『やまと新聞』は、1915年11月以降、「日本は印度三億の人民を敵として何の得る所ありや」として日英同盟にもとづくインド出兵に反対するキャンペーンを展開し、¹⁴⁾ 「印度人自身の自覚の下に生じたる事態に対しては決して我国の協力を必要とせらる理由なし。換言せば独逸国が英国に代って印度を征服し奪略せんとする場合以外、如何なる騷擾も動乱も我不関焉のみ」と断言していた。¹⁵⁾ 日印協会の副島八十六も「協会を離れた個人」の資格で「日英同盟は対手国の内乱に迄及ぼすものであらうか」と疑問を提起していた。¹⁶⁾ ここには、明らかにシンガポールの反乱の経験にたいする反省が生きている。

ところが、1915年11月下旬、日本政府はイギリス政府の要請で二人のインド人革命家ラーシュ・ビハリー・ボースとヘランバラール・グプタにたいする日本からの退去命令を出した。日本の内部で起こったこの事件は、一方で日本人のあいだにインドの民族主義者達への共感をうみだしたが、他方で動揺をも誘った。例えば、『やまと新聞』の論説は、「両氏及び其の同志は勿論、印度の多数人にして、両人退去の事に憤慨するの極、或は排日氣勢を煽るが如きあらば、是れ印度人を猜疑する英国人の手を額にして慶する所たらざる可らず。吾人は今深く之を懸念す。故に之を以て我が政府及び彼等印度人の省思を促す」（傍点引用者）としてインド人の反日発言の方向に警告を与えている。¹⁷⁾

12月3～4日、同紙はグプタが投書した「英国の対印度政策を論じて仁愛なる日本国民に訴ふ」

と題する文章を載せた。論調は厳しかったが、同紙のかねての主張と通じ合うところも多かった。グプタはシンガポールの反乱に言及して、

「最近に於る日本政府の行動は実に印度国民に対する一大打撃なりき。素より日本は其日英同盟の束縛を受くべしとは雖も曩^{さき}には新嘉坡に於る印度兵の暴動に対して艦隊を派遣し暴動兵士を射殺せんとは我等の夢想せざりし所也」

として日本の加担を非難した。同時に、「吾等印度国民は、日本が何故「印度貿易」より大利を博し得べき今次の黄金機会を捉ふるに怠慢なりしかを考へざる能はざりき」とした部分に胸を撫で下ろす論者もあったと思われる。この点では、1915年に日本に滞在したラーラー・ラージパト・ラーイなどインドの民族主義者、革命家達が日本の世論を動かすと同時に、逆に日本のイデオログの考え方が彼等の発言に投影することもあったといえよう。

1916年に雑誌『太陽』に出された未廣一雄の二つの評論は、反乱弾圧への加担を、アジアにおける経済的権益拡大の好機をみずから放棄した行動として捉えている。

まず、一月号の評論において、イギリスはインド市場から日本を締め出してこれを独占的に確保するためにインドの内乱の鎮圧に日本を引きずり込み、インド民衆の反日感情を煽ろうとしているとのべ、シンガポールにおける日本人の行動はこの奸計に乗せられたものであると指摘した。¹⁸⁾ 即ち、

「彼の新嘉坡の義勇兵なるものは、一体何等の名分に依って土人と戦ったのであるか、元來他国の居留民が一国の内乱に関与すると云ふことは不法の甚しいことではなからうか、…

英人は日本人をして印度人の歡心を失はしめる百般の工夫を講じて居る。新嘉坡の在留日本人は何故に印度人の歡心を失ふやうな仕事をしなければならなかったのか…」

として在留日本人の採った選択を批判したのである。未廣の評論は一見インド民衆の独立を目指す動きへの共感の立場からの批判に見えるが、彼の考えの基礎にあったのはイギリスにあまり気を揉ませず「英人と印度人との争ひに関しては全く中立の態度を執る」という内政不干渉の名における国益外交の追求であった。その意味では、義勇兵編成を決意した在シンガポール日本人社会の意志決定者達との距離は決して遠くなかったといえるのである。

その後、『やまと新聞』紙上のグプタの投書を読んだ未廣は、『太陽』4月号に「新嘉坡暴動鎮圧事件」と題する文章を寄せ、インド貿易の「黄金機会」を利用しようとしないうとして日本の外交を批判したグプタに賛意を表わし、重ねてシンガポールの反乱に触れた。¹⁹⁾

「…實際は守備兵の起した内乱であり、居留民の出陣も陸戦隊の上陸も適當の名分を欠いて居る。要するに他国の内乱鎮圧に傭はれたと云ふことになるのである。」

未廣が描いた日本のとるべき「大経論」とは「唯四億の支那人、三億二千万の印度人及五千万の馬來人を經濟上の顧客とすること」にあった。まさに、反乱への介入はこの点から批判されたのである。大川が未廣の第二の評論を「極めて明快剴切^{がいせつ}」と讃えたとき、未廣のこの思想を当然の前提として支持していたのであろうか。

これまで見てきたように、反乱鎮圧への加担を批判する立場は第一次世界大戦期の日本においてたしかに存在していた。しかし、それによって批判者達の中国認識はほとんど動かず、むしろ中国における「権益」確保の延長上にシンガポールの反乱を見ていたように思われる。『やまと新聞』はイギリスにたいし「支那に於ける日本の絶対優越権を実質的に承認」させることを日英同盟継続の条件としていたし、²⁰⁾ 未廣も第一の評論において楊子江流域および福建省を「日英両国共同の特殊利益地」として中国に認めさせることを目指していた。日英同盟の役割についての評価は変わりつつあったが、同盟を支えた帝国主義の論理はかえって強化され、反乱鎮圧への加担を批判する立場はそのままアジアにおける反帝国主義運動の支持へと接続するものではなかった。

グプタの投書のなかに、中国を席卷した日本商品ボイコット運動にたいする次のような解釈があることに注意しておきたい。²¹⁾

「日本の支那に対する合理的要求は各国の批判を蒙りたるが就中米国及び支那に於ける英国新聞紙より苦々しき非難攻撃を受けたり、而も単に言論の反対のみに非ざりき、中部及南部支那に於ける未開の支那人は彼等英人の擁護により、否な其煽動により日本品を排斥せり、日本国民は同盟国民によりてかゝる暴状の試みられたるを或は感知せざらん、而も事實は昭々として掩ふ可らず、然れども日本の東洋に於ける覇者の地位は決して是等小葛藤に由って其安定を侵さるるものに非ず、又日本は西欧諸国の蚕食に対して克く自国の洋洋たる希望を保護すべき実力あるは吾等の信じて疑はざる所なり。」(傍点引用者)

このような日中関係にたいする理解は、当時の日本在住のインド人革命家の一般的認識を示すものであろうか。それとも、彼等の接触した日本の政治家ないしはイデオログの考えを反映させたものであろうか。おそらく、その双方に部分的にかかわっていると推測される。我々はグプタの投書に示された日本批判を冷静に見つめると同時に投書への過程を慎重に検討する必要がある。

しかし、21ヵ条要求提出後の日本商品ボイコット運動は、中国においてだけでなくシンガポールにも波及する形勢にあった。未廣や大川の展開した議論もまた、ひろくアジアの近代史のなかでその意味を見極めなければならない。

4 シンガポールにおける日本商品ボイコット運動

1915年段階における東南アジアの日本商品ボイコット運動については、大衆的な民族運動の形をとらず主として中国人の商人組織によって推進されたこと、¹⁾ また、シンガポールの場合には戒嚴令下にあったため反日への気運の強かった割にはそれほど損害を与えなかったこと²⁾ がすでに指摘されている。

ところで、シンガポールでは時期のうえで日本の中国政策にたいする抗議の表面化はインド兵の反乱を包みこむような形で起こり、とくに反乱後の時期は「中日交渉」の最終段階と重なり抗議行動の激化への兆しがみられた。佃光治は反乱とボイコット運動との関係を次のように説明している。³⁾

「邦人の義勇的努力は間もなく酬ひられた。同年5月、日支交渉に基由する支那人の排日運動は南洋に於ても猛烈の勢ひを以て演ぜられた。物資の需給関係に於て支那人の天地である南洋で、其大反抗を被っては邦人たる者堪ったものでない。殊に当時は邦人の発展は今日の如く盛んでなかったもので、半島の田舎では其日の生活に困る者さへあった。帝国官憲は当面の救済策を英国政府に迫った。総督府からは忽ち嚴重なる命令は四方の地方官に向って発せられた。如何なる辺陬の地角でも英人警部の指揮する印度巡査は銃剣を以て邦人の生命財産を護った。警察は特に一定の物価表を公布し、若し此価格を以て購買に應ぜざるもの若くは日本人の購買を拒絶する者は營業を禁止するといふのであった。利を見るに敏なる支那小商人の何うして排日運動を継続されやう。間もなく排日運動は歇んだ。予は之を見聞して実に感涙に咽んだ。英国官憲の断乎たる邦人救済手段は、恰も我が在留民が義勇隊を組織し、剣戟を執って英人の危難を救ったのと同じき、好意と同情の極致である。ああ情けは他人の為でない。総て我が身に酬ひ来る美德である。」

ここからは、反乱弾圧への日本の協力がインドの民衆に及ぼす影響に危惧を抱いた佃の姿は想像できない。それほど中国人の抗議行動が日本人社会に与えた衝撃は痛切なものとして感ぜられたのであろう。

と同時に、日英の相互依存の関係の背後には在シンガポール日本領事館の側からの度重なるイギリス当局への働きかけがあった。藤井領事の報告によれば、すでに1914年10月、即ち「山東攻戦区域問題」などが起こった頃からシンガポール市内には「日貨抵制」についての檄文が貼られ、21ヵ条要求が出された翌年1月には檄文が戸別配布された形跡もみられ、3月に入ると秘密結社設立の噂も耳に入り、華字紙のなかには「激烈ナル文字ヲ羅列スルモノ」もあった⁴⁾。このため、領事はその都度抗議の動きを封ずるよう要請したが、イギリス側も各紙の編集長を呼び出してそのような主旨の記事および論説の掲載の禁止を命ずる一方、警察を用いて集会等の取締りに乗り出したのである。おなじ公信の次の文章のなかに、きびしい言論規制とこれにたいする抵抗、そして言論弾圧に賭ける日本側の思い入れの深さを察することができよう。

「其ノ後当地官憲ハ本月十五日各新聞ニ対シ日支両国間ノ時局問題ニ関シテハ一般支那人ノ腦裏ヨリ根本的ニ事件ヲ忘却セシムルノ手段トシテ其ノ如何ナル種類ノ記事論説即假令弁駁警告的ノ論説ト雖一切新聞紙上ニ掲載セサル様注意セル趣ナリ。

加之民政長官ノ本官ニ語ル所ニ依レハ当地官憲ハ支那民心ノ動揺ヲ慮リ先頃ヨリ一切支那ヨリ輸入スル新聞紙ヲ差押ヘテ之ヲ燒棄シツツアリ、漢字新聞社ハ之ニ対シ結束シテ總督ニ交渉嘆願スル所アリシモ拒絶セラレタリト謂フ。」(傍点引用者)

シンガポールにいる中国人の脳裡から中国における日本商品ボイコット運動を「根本的ニ忘却セシムル手段」が計られていたのである。それは反乱兵にたいする公開の処刑が行なわれている時期でもあった。反乱にかんするイギリス側の情報と見解を提供する場となった『ストレイツ・タイムズ』紙からは、1915年3月以降シンガポールに反日の動きがあったことはもとより中国において「日貨排斥」運動があった事実すら想像することが難しい。わずかに、6月28日付の同紙に、国産品奨

励は許されるが外国商品ボイコットには嚴重なる措置を取るという民・官双方宛ての袁世凱の電令が紹介されている。『ストレイツ・タイムズ』紙の論説の次の文章のもつ重味ははかり知れなかったのである。⁵⁾

「我々は現在すべて戒嚴令下にある。誰でも軍事法廷に出され、裁判に付され、銃殺を命ぜられることがあり得るのである。」

言論弾圧の傷痕は華字紙に歴然としている。ここでも、シンガポールはもちろんのこと中国における「日貨排斥」の動きを報じうる状況にはなかったが、当時の中国人社会の抵抗の姿勢をかいまみることもできる。「祖国要聞」欄などで「救国儲金」（救国貯蓄）の運動を報じていた『振南報』紙は、1915年7月13日付で、『大阪朝日新聞』の報道として18日（5月18日）に東京築地の精養軒で開かれた「日本国民連合会」の決議を紹介している。『朝日新聞』が実際に報じた所では、「対支外交の失敗を痛撃し、政府弾劾の気声を昂ぐべく」催された対支連合大会では政治指導権の掌握や布教権の要求などむしろ中国にたいする強硬な発言が目立ったが、⁶⁾『振南報』紙は「皆列举大隈政府对華外交之失着」という一点に絞ってみずからの記事を引き出したように思われる。⁷⁾

他方、藤井領事が接触したのはイギリス側だけではなかった。シンガポール駐在の中国総領事胡惟賢にたいしてもおなじ要請を行っていたのである。さきに引用した藤井領事の公信によれば、胡惟賢は「快ク之ヲ諾シ極力防圧ニ尽力スヘキ旨ヲ語り既ニ華僑商務總會幹部ニモ依頼シテ民心ノ鎮撫ニ尽セシメ居リ」という状況であった。

これよりさき、中国総領事は、「中日交渉」の平和的進捗を助けるために外国商品排斥などの輕挙妄動に走ってはならないという本国政府の訓令を受ける形で、中国人社会に向けての通告を3月12日付で華字紙上に発表し、この危機に対処するために一致団結し、一時の興奮に酔って無益の挙動に出ることなく当地の法律を守るよう求めていた。通告のなかには外貨排斥を激しい言葉で訴える匿名のビラが出されていたことも記されている。その後、通告の効果を見定めた藤井領事は胡惟賢総領事と交渉し、この「諭告」（藤井領事の表現）5千枚を総領事の費用で印刷し、三井支店の協力を得て日本人商人と関係のある華商に配布する手筈を取った。⁸⁾ 1914年の孫文による中華革命党の結成に伴う国民党の組織上の混乱に影響を受けていたにせよ、⁹⁾ 中国人社会の危機意識を外に見えにくくしていた事態の裏にはこのように周到な日本側の動きがあり、それを支える戒嚴令体制があった。

もっとも、『ストレイツ・タイムズ』紙は、日中関係について「日本と中国」と題するコラムで最小限報ずるにとどまっていたが、袁世凱政府が21ヵ条要求を呑んでしばらくのちに論説「中国問題」を載せ、具体的な事柄にはまったく触れずに「中国人には我慢しうる多くのものがあるが独立はその一つではない」として独立保持への決意は「ひろく世界の同情を得るだろう」とのべて中国にたいする「同情」を示した。¹⁰⁾

また、胡惟賢総領事も、「中日交渉」後の最後通牒を受け取る段階にある北京政府から僑民を安撫し輕挙旨動してはならないという電文を得たのち、イギリス当局と接触を持ち、「我が僑胞はイ

ギリス政府の保護のもといつものように安居営業しなければならない。当地はなお戒厳令下にあり、特に法律を遵守し、地方の治安を守り、いささかも紛擾を起こしてはならない」という緊要通告を5月8日付でふたたび新聞紙上に発表している。¹¹⁾

戒厳令体制という枠のなかではあるが、イギリスと中国の政府レベルの対日姿勢の微妙な動きを推察することができる。それは「感涙に咽んだ」俳記者が捉えることのできなかった現実である。

シンガポールにおけるインド兵の反乱の背後にドイツを、そして日本商品ボイコット運動の背後にイギリスを想定することでは把握しきれない歴史の現実が、第一次世界大戦下に進行しつつあったといえよう。

むすび

1915年2月25日、音羽・対馬の陸戦隊員の任務が解かれ、ヤング総督はクリケット・グラウンドで感謝の意を表わす閲兵をおこない、そのなかで次のようにのべている。¹⁾

「貴国民ハ吾人共同ノ敵タル独逸ノ東洋ニ於ケル強力ノ要塞タル青島ヲ攻略セラレ其ノ奪取ハ貴国民独特ノ秩序整然トシテ間然スル所ナキ方法ヲ以テ行ハレタリ而シテ予ハ右攻囲戦中我皇帝陛下ノ軍隊ノ一部カ貴国民ト共同シテ戦ヒシコトヲ悦フモノナリ」

日英間に思惑の相違はありながらも、日本の青島占領とシンガポールにおけるインド兵の反乱の鎮圧とは相互補完の関係にあった。1914年末から1915年末にかけて、アジアでは、日本の青島占領と21ヵ条要求、これに抗議する中国と東南アジアにおけるボイコット運動、カルカッタ港に下りた駒形丸インド人乗客に向けられた発砲、シンガポールの反乱、そして二人のインド人革命家にたいする日本政府の国外退去命令と一連の事件が起こっていた。しかし日本における第一次世界大戦史研究においては、日中関係を別にしてその他の動きについては十分な注意が払われてきたとはいえない。それは、日本における南アジア認識あるいは東南アジア認識の乏しきの表われであるとともに、日本の中国観のあり方が投影したものともいえる。

シンガポールにおけるインド兵の反乱が同地域における中国人の日本商品ボイコットへの動きを促進する土壌を準備し、反乱鎮圧への日本の加担がそれを助長する役割を果たした可能性も否定できない。約800名のインド兵からなる第五軽歩兵連隊の行動のなかに第一次世界大戦の性格が凝縮されているのである。

「註」

まえがき

(1) 日英同盟については、

黒羽茂『日英同盟の研究』東北教育図書株式会社 昭和43年。

Peter Lowe, *Great Britain and Japan 1911-15 - A Study of British Far Eastern Policy*-, London, 1969.

Ian H. Nish, *Alliance in Decline-A Study in Anglo-Japanese Relations 1908-23*, London, 1972.

などがあるが、シンガポールの反乱についての直接的な言及はない。

- (2) 青年亜細亜同盟編『印度独立運動史概観』青年亜細亜同盟 昭和17年 17ページ。
- (3) 大川周明全集刊行会編『大川周明全集』第二巻 岩崎書店 昭和37年 561-2ページ。
大川が反乱の起こった月を1915年1月としている。
- (4) 私見の範囲では次のような論文・著書がある。

R. W. Mosbergen, *The Sepoy Rebellion- A History of the Singapore Mutiny*, 1915, Unpublished Thesis, University of Malaya, 1954.

Ong Ai Choo, *The Sepoy Mutiny in Singapore* 1915, Unpublished B.A. Honours Thesis, University of Singapore, 1973.

Nicholas Tarling, "The Singapore Mutiny ,1915," *Journal of the Malaysian Branch of the Royal Asiatic Society*, Vol. LV, Part 2, 1982.

Khushwant Singh and Satindra Singh, *Ghadar 1915-India's First Armed Revolution*, New Delhi, 1966.

Pritam Singh Panchhi, *Gadar Parti ka Itihas* (in Hindi), Delhi, 1961.

Jagjit Singh, *Ghadar Party Lehar* (in Panjabi) ,2 nd ed., Delhi, 1979.

なお、本論文の草稿を書き終えてのち、R.W.E. Harper and Harry Miller, *Singapore Mutiny*, Singapore, 1984 に接した。著者達が自認するように「反乱にかんする初めての詳細な叙述」であるが、方法的には従来の研究の枠組を超えてはいない。この点については研究史にふれる際に補足したい。

1.

- (1) Dewitt C. Ellinwood, Jr., "A Historical Study of the Punjabi Soldier in World War I "in Harbans Singh and N. Gerald Barrier (eds.), *Punjab Past and Present - Essays in Honour of Dr. Ganda Singh*, Patiala, 1976, pp. 340-1.
- (2) Nish, *op. cit.*, p. 135.
- (3) 『やまと新聞』大正3年9月24日。
- (4) 『大阪朝日新聞』大正3年10月25日および10月28日。
- (5) Khoo Kay Kim, *The Beginnings of Political Extremism in Malaya*, Ph. D. Dissertation, Department of History, University of Malaya, 1973. pp. 6-8.
- (6) Nish, *op. cit.*, p. 97.
- (7) Mosbergen, *op. cit.*, pp. 4-5.
- (8) Nish, *op. cit.*, p. 95.
- (9) Teo Moey Marianne, *Singapore 1914-1918*, Unpublished B.A. Honours Thesis, Department of History, University of Singapore, 1979, p. 22 and p. 29.
- (10) *Report on the Census of the Straits Settlements, taken on the 10 th March, 1911*, p. 9, Table I.
- (11) *Ibid.*, pp. 79-84, Table VII.
- (12) 例えば、『横浜貿易新報』大正4年2月23日や『実業の日本』大正4年3月28日参照。
- (13) Teo, *op. cit.*, pp. 6-8.
- (14) *Ibid.*, pp. 9-10.
- (15) 西村竹四郎『シンガポール三十五年』東水社 昭和16年 188-9ページ。
- (16) 新嘉坡南洋及日本人社編『シンガポールを中心に同胞活躍-南洋の五十年』東京北斗書房 昭和13年 225-6ページ。
- (17) 同書496ページ。
- (18) 佃光治『南洋より』好文館(シンガポール)大正5年 5ページ。
- (19) 篠崎護『南洋進出の百年-シンガポール邦人略史-』『「南十字星」記念復刻版-シンガポール日本人社会の歩み-』シンガポール日本人会 1978年 45ページ。

2.

- (1) Lt. Gen. Sir George MacMunn, *Turmoil and Tragedy in India- 1914 and After*, London, 1935, pp. 105-113.
- (2) Panchhi, *op. cit.*, pp. 159-163 and Jagjit Singh, *op. cit.*, pp. 126-129.
- (3) Mosbergen, *op. cit.*, p. 39 and p. 46.
- (4) Tarling, *op. cit.*, p. 26 and p. 52.
- (5) Harper and Miller. *op. cit.*, pp. 8-12 and pp. 238-240.

- (6) Tarling, *op. cit.*, p. 27.
- (7) *Ibid.*, p. 29 and Mosbergen, *op. cit.*, pp. 12-15.
- (8) Mosbergen, *op. cit.*, pp. 15-16.
- (9) 反乱の経過については、モスベルゲン、ターリング、マクマン、ハーバーとミラーのほか、1915 *Straits Settlements Annual Report* (cited in D. Moore, *The First 150 Years of Singapore*, Singapore, 1969, pp. 549-555)も参照。
- (10) Harper and Miller, *op. cit.*, p. 55.
- (11) *Ibid.*, p. 68 and MacMunn, *op. cit.*, p. 109.
- (12) Khushwant Singh and Satindra Singh, *op. cit.*, p. 46.
- (13) Mosbergen, *op. cit.*, pp. 24-25.
- (14) Tarling, *op. cit.*, p. 32.
- (15) Harper and Miller, *op. cit.*, p. 141.
- (16) *Ibid.*, p. 192.
- (17) *Ibid.*, *Dramatis Personae*.

なお、モスベルゲンは、軍人の死者を25名としている (Mosbergen, *op. cit.*, Appendix IV (a))。

- (18) *Ibid.*, pp. 203-4.
- (19) Tarling, *op. cit.*, p. 51.
- (20) 西村前掲書163-4ページ。ただし、処刑されたインド兵はムスリムである。ほかに公開処刑にふれたものとしては、藤井領事の報告書 (後記する『日本外交文書』に所収) および『東京朝日新聞』大正4年3月12日の「印度叛兵の死刑-西洋少女の見物」がある。
- (21) 『やまと新聞』大正4年4月4日。
- (22) Teo, *op. cit.*, p. 51.
- (23) Ong, *op. cit.*, pp. 23-25.

この論文は、調査委員会の報告書の結論を紹介しながら、その観点を批判している。

- (24) Mosbergen, *op. cit.*, p. 53.
- (25) Philip Mason, *A Matter of Honour - An Account of the Indian Army Its Officers and Men*, London, 1974, p. 427.
- (26) Ong, *op. cit.*, pp. 13-14; Mosbergen, *op. cit.*, pp. 64-65; Tarling, *op. cit.*, pp. 42-43.
- (27) Ong, *op. cit.*, pp. 14-15.
- (28) ラウテルバッハについては、

Thomas Lovell, *Lauterbach of the China Sea*, London, 1930 があるが未見。

- (29) Ong, *op. cit.*, p. 1.
- (30) Sohan Singh Josh, *Tragedy of Komagata Maru*, New Delhi, 1975, pp. 69-71.
- (31) Arthur Young to A. Bonar Law, Aug. 19, 1915, CO 273/423.
- (32) No. 67, Secret, V. Obdeijn, Medan, Sept. 14, 1915, CO 273/432.
- (33) War Office to India Office, Jan. 16, 1915, CO 273/433.

なお、この史料についてはすでに Khoo Kay Kim *op. cit.*, pp. 6-8 に引用されている。

- (34) Mosbergen, *op. cit.*, p. 61 and Tarling, *op. cit.*, p. 46.

3.

- (1) 外務省『日本外交文書』大正4年3冊下 昭和44年 1199ページ。
- (2) 西村前掲書 162ページ。
- (3) 前掲『日本外交文書』1200ページ。
- (4) Song Ong Siang, *One Hundred Years' History of the Chinese in Singapore*, Singapore, 1967, p. 512 and p. 515.
- (5) John G. Butcher, *The British in Malaya 1880-1941. The Social History of a European Community in Colonial South-East Asia*, Kuala Lumpur, 1979, p. 124.
- (6) 反乱に際しての日本海軍の動きについては、軍艦音羽、軍艦対馬および第三艦隊の『戦時日誌』(戦史部図書館所蔵)に記されている。
- (7) 佃前掲書 22-23ページ。

- (8) 第三艦隊『戦時日誌』大正4年2月18日。
- (9) 前掲『日本外交文書』1201-2ページ。
- (10) 佃 前掲書 24-25ページ。
- (11) "Japanese Books and Papers on the War" and also "Notes on a Book entitled *From Nanyo* by M. Tsukuda" from Commander in Chief, China, CO 273/475.
なお、この史料はこれまでクー・カイ・キム、ターリングなどの研究に引用されている。
- (12) 『やまと新聞』大正4年2月26日。
「『やまと』は大正の改元を中心として前後三、四年がその全盛期であった。」小野秀雄『日本新聞史』良書普及会 昭和23年169ページ。
- (13) 『日印協会々報』第21号 大正7年1月。
- (14) 『やまと新聞』大正4年11月12日。
- (15) 同 11月15日。
- (16) 同 11月14日。
- (17) 同 12月1日。
- (18) 未廣一雄「日本より英国へ要求すべき三箇条の提案」『太陽』22巻1号 大正5年1月。
- (19) 同 「新嘉坡暴動鎮圧事件」『太陽』22巻4号 大正5年4月。
- (20) 『やまと新聞』大正4年12月16日。
- (21) 同 12月4日。

4.

- (1) Yoji Akashi, "The Nanyang Chinese Anti-Japanese and Boycott Movement, 1908-1928- A Study of Nanyang Chinese Nationalism," *Journal of the South Seas Society*, Vol XXIII, 1968, p. 73.
- (2) 新嘉坡南洋及日本人社編 前掲書 248ページ。
- (3) 佃光治『南洋の五年有半』南洋及日本人社 大正8年 12-14ページ。
- (4) 藤井領事から加藤外務大臣宛大正4年3月22日発機密公信（外交史料館所蔵）。
- (5) *The Straits Times*, March 17, 1915.
- (6) 『大阪朝日新聞』大正4年5月19日および『東京朝日新聞』同20日。
- (7) 『振南報』1915年7月13日。
なお、『振南報』などシンガポールの華字紙の動きについては改めて論じたい。
- (8) 藤井領事から加藤外務大臣宛 大正4年5月3日発公信。この公信には新嘉坡駐在中国総領事胡惟賢の通告が添付されている（外交史料館所蔵）。
- (9) C.F. Yong and R. B. Makenna, "The Kuomintang Movement in Malaya and Singapore, 1912-25," *Journal of Southeast Asian Studies*, Vol. XII, No. 1, March, 1981.
- (10) *The Straits Times*, May 21, 1915.
- (11) 『国民日報』1915年5月10日ほか各紙。

二つの通告の内容について大阪外国語大学の田中仁氏から御教示を得た。

むすび

- (1) 前掲『日本外交文書』1202ページ。 (1984. 10. 16)

「付 表」

第五軽歩兵連隊の構成

右翼	第一	{	A 中隊	{	ムスリム・ ラージプート (=ランガール)
			B 中隊		
	第二	{	C 中隊		
			D 中隊		
左翼	第三	{	E 中隊	{	ムスリム・ ジャート
			F 中隊		
	第四	{	G 中隊		ヒンドゥスターニー・ パターン
			H 中隊		

(資料) Nicholas Tarling, "The Singapore Mutiny, 1915"
より作成。